
大伴の名の下に！

SEALs

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

大伴の名の下に！

【Nコード】

N4911Z

【作者名】

SEALS

【あらすじ】

注：この物語は受験の鬱憤を晴らすために推敲されております。十五歳の品川敬嬢は、日本生まれ、韓国育ち。日本の何処の『衛府市』に住んでいた彼は、小三の時以来の帰郷を果たすことに。

ところが、そこに向かうはずが、衛府行き駅のホームに、春から通うはずの『衛府東高校』の制服を着た美少女がいて……？
「敬嬢……さんですか」「いや、先輩なんでしょ？敬語は無いですよね」「……っ」

地の字が足りない作者が送る、やけに背の低い少女・大伴絢佐と

その仲間達が繰り広げるドタバタコメディ！

第?..?

『ようこそ、衛府市へく?』

皆に問いたい。

衛府って、知ってるか?

『衛府』は...って、本来の意味は調べてもらうとして、問題は『衛府市』。衛府市だ。

衛府市は、知る人ぞ知る秘境。関東にある。あるんだけど。鉄道のみがそこに行く方法なのだ。

そして俺、品川敬嬢は、故郷である衛府に帰ろうとしているのだが...?

「...なんだ、この地図...」
群馬県は高崎市の、高崎駅の電光掲示板。俺はそこから伸びる一本の線を凝視した。

「ほんとに一つだけなんだな...」
明るい駅は、春休みだからか、学生や会社員よりも、私服の人の割合が非常に多い。

...で。俺は目を頭上のデジタルを見つめる。
どうしよう。

時計を見ると、アナログの針は二時を差している。そして、衛府と高崎を繋ぐ唯一の『衛高線』は電車が一日三回。そして、平日は二時半発の電車が最後の電車だ。

さっきから『』と『電車』を連発しているけども、そこは許していただきたい。

...ふう。ため息をつく。

三十分間...だよ。どうしようかなあ...。

ポケットに手を入れてみる。何も無いけど。

着ているのは、なんとスーツである。

いや、就職活動ではない。シユウカツではないんです。

ただの帰郷なのだが、俺の母親 祐里子は『日本なん

だからびしいつとね!』と意気込んで・・・よりによってこれとは

ここにずっと居座る訳にはいかなないので本屋に足を運んでみる。

高崎は相当前に来たばかりだったが、難なく見つかった。

俺は、小三の頃に本屋に行ったつきりなのだが、今までいた国・

・韓国でもあったし、その辺は心配しなくていい。

と、思ったんだが。

「少年ジャン の中身がほぼ全部違っている・・・!?!?」

少年 ヤンプという、全国の青少年が求める漫画の表紙が全く知

らぬキャラクターになっていた。常識なのだろうが、俺にとっては

衝撃だ。

「むう・・・やはり・・・分からないもんだね、日本」

スーツの男(俺だが)は嘆息するばかりである。

なんとなく本屋にいるのも異文化に触れているようで嫌になった
ので、ぶらぶら時間を見つつ歩くことにした。

丁度、ケータイが鳴る。メールのようだ。

「 題：久しぶり!： 本文：敬ちゃん!お久しぶりですっ!会
えるの楽しみ(＾o＾)ノ

待ってるねっ!!敬ちゃん!

」

杉原奈帆。俺の幼馴染みだが、残念なことに小学生以来会って
ないので、どんな顔か分からなかったのであった。というか覚えてない。

写真はある。昔のが。自分の携帯電話は日本で契約し、奈帆のケー
タイの番号はアパートへの入室の際教えてもらった。

今のうちに説明しておく、衛府でお世話になる『杉原荘』が彼女の実家で、家長で商店街協議会会長の康一さんと、元気なおばさんが切り盛りしている。昔俺が遊んだ記憶はあるが、うっすらとしか思い出すことができなかった。

あくまで曖昧な記憶だが、なんとなく衛府の市街地も。

衛府の大部分の商業は商店街が支えていて、市街地は皆そんな感じだったと思う。

外に出て、騒音を耳にする。

……うわ。春の空だ。あつたけえ。

もちろん夕焼けなどではなく、カップルや学生が行き来する午後の一コマである。

品川敬嬢、十五歳。六年の韓国駐在を終え、六年振りに帰ってきた……。

彼は世にも珍しい『衛府』の出身。そして、衛府東高校にこの春入学する……。

こんな感じに自己紹介（誰に）。むう。やはり分からんね、日本。なんでこんな雰囲気？

というか、水玉の青いネクタイ。黒の上着。茶色の使い古したベルト。光る硬い新品の革靴。

「なんで日本でこんな……」

道通る人々がなんか見てくる気がしなくもない。

ああ。

やだ、やだ。そう思うと、更に嫌になる俺だった……。

「……」

少女はじつと一点を見つめていた。

短く揃えた短い黒髪がさりと流れた。

彼女が見つめるその先には……

「しながわ……けい……けい……敬嬢」

何故か名前を言っただけで赤面する少女。

彼女の脳内には、歓喜と困惑。やっと会えたという心と、騙して良いのかという罪悪感。

「うう……」

ますます赤くなってしまう。

もつとすっかりしなきゃ。

そう頬を叩いた彼女は、彼への一步を踏み出す。

が。彼女は動きが止まった。いや、止められたのだ。

「……!?!?」

彼女の左肩を誰かが優しく叩く。

「やあ、君どこの子？俺達と遊んでかない？」

見知らぬ若い二人組が、少女に話しかけてきた……。

「は、放して下さいっ」

どことなく空と時計を眺めていた敬嬢が耳にしたのは女の子の悲鳴だった。

見ると、駅の陰に隠れてチンピラというかプレイボーイみたいな（表現できんっ！）二人組の男が二人で一人のひ弱な少女にけしかけているではないか。

「……?」

ここで俺の思考は止まった。

彼女が着ている服は、衛府東高校の制服だったのだ。

衛府 高崎間 一時間。

無論若者、高校生が一時間も掛かる高崎駅に来るのは不可解なので、一応声を掛けるべく近寄ってみる。

………。こういう時、なんて言えばいいのか？
う、うーん……こういうのは……か、彼氏……ってこと
で……？

い、いや待て。じゃ、なんて呼ぶ？鈴木とか言うのは不自然すぎる。危ないし。

うつつうつ……はっ。もう、適当で良い気がしてきた！

大丈夫、こっちはスーツだ。必ず大人だと思ってくる！

っ、つまり……父親？……も、それもいや！

「お、おいっ！アヤ！」

雑に一般的な名前を浴びせてみる。頼む、黙っててくれ……。

三人がこっちを向く。

「ああん？なんだてめえ」

男がいかつい顔で覗いてくる。できるだけ平然を保とうと努力、努力。

そつと少女を見れば、瞠目というほどまでに目を見開き、瞳に涙を浮かべている。

うわ。なんか……この男ら、うぜ。何泣かせてんじゃアホ。

無駄に怒り湧いてきたぞ。

「俺の娘に手え出さんで貰おうか」

あ。変な台詞だ。と、とりあえず結果オーライだっ！

「はあ？娘？」

もう一人が変な声を出す。「お前とこの娘、全然似てねーじゃんかよっ」

奇声を張り上げる。そして笑い出す。 やっぱうぜえ。

いや、似てないという点については否定しませんかね！！

「ぐっ……なにすんだてめえ！」

靴でスニーカーの足を踏む。思いつきり。靴、硬いの選んで良かったと思ったりする。ありがと母よ。

「大韓民国でえ」

もう一方の足で思いつきり吹っ飛ばす。

「鍛えた脚力う」

そしてかえす足で顔面に！

「なめんじゃねえええええっ！！！！！」

台詞はもういちいち分からん。

自分で冷静に突っ込みつつ、迷いなく少女の小さな手を掴む。よくやった、俺。よく堪えたぞ。

「ほら、行くぞ」

少女は、じっくり俺を見つめ、怪しい奴ではないことを確認し、大きく頷いた。

「ふう・・・この辺でいいかなあ」

荒い息を上げる俺と少女は駅の改札口まで来てしまった。

今思えば、ここまで来る必要は無かった気がする。

「・・・っ、・・・は、・・・は・・・あ、ありがとうございました」

少女は膝に手を当てて呼吸を整える。

ショートの黒髪、大きい瞳。白い肌。灰色のブレザー、赤のスカート、黒のニーソックス・・・ておいおい。こ、これは単純に男は皆寄ってくるだろうな〜と思っただけで、べ、別にかわいいとかそういうことでは。

「・・・なんですか。気持ち悪い」

「ん？ああ、すみません」

気が付けば見つめていたらしい。

「・・・やらしい」

「ええ！そんな目で見てたの俺！」

ジト目で見える少女。

ここで俺は気が付いた。こいつ、結構あぶねえかも。というか何で助けたんだろう。あ、あれ？お、思い出せないや・・・記憶喪失かも。

「・・・」

「え？」

「なんでもないです！け・・・親切な人」

聞き取れなかった。さつきはきつと嫌なことを吐いたに違いない。

「あ、そっだ、名前は？俺、品川けいじょう。敬嬢だ」

「・・・敬嬢さんですか。わ、私は大伴絢佐です」

おおとも、あやさ。なんとなく昔聞いたような気がした。てゆうか、さつきアヤサって言わなかったっけ？

絢佐、脳内思考その「？」

あ、危なかった・・・焦った・・・。

敬嬢さんが話し掛けてきたときはびっくりした・・・。アヤって・

・・・咄嗟に言ったのかな？

もしそっだとしたら・・・うんめ・・・いや。

ないない。偶然よ。偶然。

でも、名前訊いてきたから、まだ気づいていないみたい・・・。

忘れられたのかな・・・？

う、ううん。まだ思い出してないだけよ・・・。うん、そっそっ。

あれ？だとしたら忘れてることに・・・？

もう考えないことにした。

後はもう、計画に沿っただけよ！

私は携帯の表示を見る！！

さあ、そこには！？

・・・。

ん？『明るく気さくに』？

・・・

・・・もう遅い気がする。

「そーいや、衛府東高校ですよ？なんでここにいるんですか？」
「……………っ！べっ、別に何も！」
「そうですか……………あ、俺、来年衛府東高に入るんですけど、一応先輩って……………ことですよ？」
「な、何よ！し、身長なんてそんなもんよ!!！」
「（気にしてるんですか……………）」
「なんか言っただ！？」
「……………なんでもありません」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4911z/>

大伴の名の下に！

2012年1月2日00時49分発行